

目的 高齢者婦人の衣生活も、その多くは既制衣料で占められているが、前調査により素材に対する関心が高い結果を得た。衣服材料の嗜好には、心身のおよび生活的な見地から何らかの要因目的があって選択されているのではないかと考えられる。今回は特に風合いを中心に、積年による変化の有無について取り上げ究明した。

方法 対象は、20才代50名、50才代、60才代、70才代各25名の計125名である。試料は市販の服地およびメーカー服地サンプルから48種類を抽出し、30cm×30cmのサイズとした。夏服ワンピースとして着用するのに最も好ましい素材上位3位までを手ざわりにより選択させ、それぞれの選択理由についても質問した。次に選出頻度の高いものから上位10種類について、HESC、風合い評価標準の6項目について照合し、試料の風合い値を調べた。さらに嗜好の要因についても分類を試み、20才代と比較することにより高齢者の素材に対する特徴を検討した。

結果 夏服ワンピース素材として、高齢者、若齢者の嗜好の共通点は“こし”があり、“しゃり感”のある風合いであり、“ふくらみ”を持たない素材であった。なお若齢者が選択の大きな要因としている“きしみ”、“しなやかさ”は高齢者は必要としなかった。また、高齢になるにしたがって、素材感知の感覚が緩慢となり、高齢者の嗜好する風合いには表面効果、織り組織との関連が強く見受けられた。